

人生のターニングポイント

村田 勝 敬

■ プロローグ

最近の学生さんは、性格や考え方の似通った人同士が嗅ぎ分けるように集まり、小集団を作るらしい。似ていることで、相槌だけでお互いの意思疎通が図れると錯覚する。多くの場合、お互いの間違いを正すことも心底を曝け出すこともない。その結果、自己の客観的位置を見失う虞（おそれ）がある。親あるいは監督が彼らに夢を尋ねると、ありふれた未来像を語るか、さもなくば寡黙を保つ。否、現在の安堵感に浸るのみで、裏打ちのない10年先の自らを「何とかなるだろう」以外の言葉で表現することができないのだ。このような人に必要なのは、強権的な指図を振る監督や全てを許容してくれる友ではなく、話を聴きつつも自己の進むべき方向を自身に悟らせてくれる“コーチ”なのかもしれない。

■ 幼少の教え

母は小学校入学祝いとして、羽仁もと子著『子供読本』を買ってくれた。いろは…順に小見出しがあり、幼い私でも理解できる平易な文章が綴られていた。それ以前に読んだ童話とは全く異なる内容であり、今思えば修身書の類いであったのだろう。例えば、『走るよりは歩め』の章の終末は「ふだんは大概怠けていて、試験の近くになってから、落第しそうだというので、駆け足で勉強したりすると、学問は覚えられないで、ただ頭ばかり痛んだりします。走るよりは歩めということ覚えて下さいませ」の如きである。この本のお蔭で「ローマは一日してなら



ず」、「二兎を追う者は一兎をも得ず」、「蛍雪の苦」、「虎に翼」などの他に、「山かけて兎は谷に落ちにけり」などの諺を覚えた。

■ 悪夢よ去れ

1967年12月27日夕方6時放映のNHK『明日は君たちのもの』に、原付二輪エンジンを搭載した木製自動車を製作したことで出演した。大川昭子アナウンサーが司会であり、東大名誉教授兼重寛九郎先生がゲストであった。放送の中で、私は木製自動車の後部に大川アナウンサーを載せてスタジオ内を走った。その後、どのタイミングであったのか忘れたが、将来の夢を質問され、「タイムマシンを作れる科学者になりたい」と無邪気な返答をした。真空管式ワイヤレスマイクを製作するなど電気に非なる関心を抱いていた頃なので、様々な歴史的背景画像を取り込み、その画像を電子頭脳なるもので再構築すれば、時代を遡ったり未来を覗ける画像を映し出すタイムマシンを作ることも可能になる…と考えていた。しかし、現在に至るまでそのような機械は作られていない。あの時「科学者になりたい」と蛇足拔きに話しておけば良かった…と、放映されたテレビ画像を思い浮かべる度に猛省した。

■ 青春の書

東京の大学に入学して間もない頃、高校の先輩から勧められた河合栄治原著『学生に与う』を読んだ。戦時中に東大教授であった著者は、学生に「対局を達観する洞察の明、大事を貫徹せずばやまない執拗な意志、自己の持ち場を命を賭して守る誠実と真剣さ、小異を捨てて大同につく和衷協同心、何よりも打てば響くがごとき情熱」を持つよう鼓舞した。一方で、教師を「人生の分岐点に立つ若人に潜める心霊に点火して、これを人生の戦いに駆る」職業と定義したが、「この名に値する教師は今や何処に姿を隠しているのだろうか。今日の教師はただ一介のサラリーマンと化した」と述べていた。

■ 夢想の世界

学部本館 18 階建ビルの中には学生相談室があり、毎週特定曜日に臨床心理士の資格を持つ素敵な女性が教育学部から来られていた。心が熱く燃えていた頃に偶然立ち寄り、その後も度々“女性心理”なるものを根掘り葉掘り質問した。この頃より、ハンス・ライヘンバッハ著『科学哲学の形成』やマックス・ピカート著『沈黙の世界』等を読み始め、バートランド・ラッセル著『西洋哲学史』やロロ・メイ著『失われし自我を求めて』に移り、やがてエーリッヒ・フロムの世界に浸った。「行為するためには、人間はまず考えなければならないことは事実だが、もし行為する機会がなければ、人間の思考は萎えて力を失うことも、同様に事実である」などを何度も口遊んでは独り合点した。多感な年頃は何かにつけて夢想するか、酒喰らって酔い潰れる。同じ無言でも、ツイッター相手の“携帯電話”や“スマートフォン”世代とは一線を画する世界があったように思う。

■ 人生の転機

杜の都では、性格も知的関心も大いに異なる者同士が集った。集う理由は麻雀や飲み会であったが、物の考え方が違う分、トコトン意見をぶっつけて議論した。大学病院裏から 300 m 程北側に位置するアパートに引っ越して、人生に大きな影響を及ぼす友に邂逅した。実はそれまでの 3 年間も級友だった筈なのに、私の記憶はこの時から始まっているのだ。

横手高校出身の彼は医学や科学から、政治、音楽、文学に至るまで卓越した洞察力を有する秀才と私は評していた。一方のぐうたら兵衛の私は、興味の湧く事柄に遭遇すると埋没してしまい、教室に行かなくなる。ある時期、伊藤眞次著『神経内分泌学』に

傾注し、松果体から夜間にのみ分泌されるメラトニンに憑かれた。それから数週間というもの、図書館でさらなる文献を繙くとともに、病理学教室や精神神経学教室に行って最新の知識を仕入れた。収集した情報を掻い摘んで要約し、メラトニンがヒトの思春期発来を説明する物質に思えると彼に話した。すると間髪を容れず、「もしそうなら、睡眠時間の短縮が起こった後に初潮が始まるのかもしれぬ」と彼は語った。当時の統計の本に“多重ロジスティック回帰分析”は存在していなかったが、私はこの仮説の検証を、統計ソフトの開発も脳裏に描きつつ、心に留めていた。彼の“目から鱗”の発想を聞かなければ、恐らく、私は何処で内科医をしていたに違いない。

■ エピローグ

以前、イタリアの医科大学教授から「イタリアでは医師免許を取得した後、タクシー運転手をしている人がいる」と聞いた。この真偽の程は未だ確認していないが、秋田市内を 1 km 歩く間に理髪店や歯科医院に次々と出会す現状を直視すると、「明日は我が身か」を戯言と払拭することができない。こうなると、10 年先の自分を確立するために今何をなすべきか（≒考えるべきか）について語り合える友（あるいはコーチ）を探し出すことは、言葉少なに安寧な日々を送れる友を見つけるよりも、喫緊の課題である、と若者に伝えたい。

(医学系研究科環境保健学講座 むらた かつゆき)

「秋大生活のひろば」No. 146 (2014 年 1 月刊)

